13
1308
3

本清

門へ 13
部
巻

# 源氏の仮寝三編叙

人生一日百年を強ふるも八億四千の想ひ
なりとか。所謂必ず視線の強きを以て熟
知せんに人間百年呼吸の数一万二千五
百息。去るまぢかの一呼吸小歳千の思ひを
加へるに八億四千の数を元体。呼吸一息
毫も忽ぐらふ時は方便

宏淵は地獄変相の画虚言より人以て
目連やくその大智徳の釈迦佛も杖ゑバ白地
の孔子にも悪口を吐れとも其余に多る
泰山府君三山玄帝の雑行苦行成道正覚
とハ縁なれり夫れを佛説に見へ経説に是今
様を看とすなれバ彌業の朱を傳ひ悪の菌
狂乱のなりの知識は叱られ牛頭馬頭の責に

なりてハ却て孫どもがゆづらぬ古き大晦日米屋薪
やお内儀さま衣さへ寒ぐんとさむしんがれて辛棒が
浄文儀傳ふ手に何れ出来て千部の草紙を綴
ほもとより本を翻さるの一端で書きなぐる

干時庚申の秋の咲く月

笑して

拙著事ゆるぐこそ 總

大夏屋
歡樂
花の宴
文左門
大多屋
於橋
於耶麻
一勝齋芳藤画

於野
於蓮

# 雪迺長崎の耶麻堺城迺假寐卷之七

東都　松亭金水編次

第十三回

そもそも人として過ぎしと能く省みて早く過と知りて改むる。是を善人とゆう過と云うべきなれども改めざる。これを不善人という。

まこと過と知るとゆうべども。我執を張りて遂に改めざるのこころ猶ほ小。その過を大なりとして殘酷の匹夫となる。罪深きこと至極なり。されば小の惰いその怠り。女の嫉

きんとう僧の思ひ差しを為して。僧人為馬遣ふ。商
孫ホ為ぐるを遣ハ固より人ふ奴性ホ。ことを聞と
等一ことを寄め旅さんとハせず。お情が邪人ホ為雑
為て。稚く為る悪計を勧むるホ。ホかの嫌るを決ホ。性を沃
ぐ。ぐわく為て。能まぐこを性裸せぐハ。ハ膳じと為の人
より同他の我白うち為見て。こを耶麻を怪まず。服を
為し。孩児を水ホ為きんと。その較計の他ハ為。留
遣いをとより為ぐ。修と為く容ホを探るホ。元留場

町ホ為りけるが今ハ名称ホ引移り〜両称習合の修
験者為り。名を寂翼院食曼と為ぐ。彼が祈りを為る
時ハ。能験程為るとの魅入まり。ハ人ホ及ぐ死奥生奥
の為ホ為ぐ為ぐ。こを正為ぐ名称為ぐ。こを選呼
て密ホ修び彼を形まびとき修法の為ぐ為ぐと人為
まぐ。名称の寂翼院へ訪ぐまぐ。ぐまぐ西ホ不動
明王左右ハ形迹羅刹奥迹の。二童子と要為為
ホハ稚くの供物を捧げ。ぐ為輝く護摩壇の仲仏

きゝ後日あり気あり。いと苦くも思ふ。百遍ハ生を処
ふ諸とく。妻時拝してありける所へ生の食曼出来
「こゝ」ハ。ハ。仏系消承ず。其ハ本町通り。お出あるとて
とゆきと。サテ老方でゞざりまん。たゝの次ハ堂僧ハう。
日く冷ゞ暮うこんトいそ見て百遍一種ず。仮食曼
の薪を又ふ。角ハ想髪ゆ。鼻ふく。色ふくして
頬骨張る。眼中失く逗ず。きハの墓と不安亦
き。不動ゆふ日狂信て。怖ーと寄りゝ。ぞる。且くあて

「妻のあり。大分要ふ乳日暮ふ。サテ本町通り
遍ゝと。見ま在条上ゆ。使のゆゝ。ぞざりまま
世ぬ。今ト問ゝで仏祈禱を。旅ひゝと中を釈。ゆ已
ゆゞ只今逗不とまゆ仏義でゆ。ぞざりません。ゞ今日
お紐已不成てまけ日生でよ。千時ゝ。邪ゆゞ。お
尋祇まゆゝ。弱ゆ。仏交納ゆ。ゝとて。さりまゝト
お引ゆゝ。果ゝ物食曼ハ。ゝとを。ゝ。荒示ゝゆ
笑ひ「こゝ」ゝ。仏ハ寧ゆ。仏ハ仏ハ痛ゝ入ま。ゝ仏程

わゝ異くこの容子。二郎位うと云ひあげう。何不把く頂く
ぬ。ぎうまうまう重ぎゝ。書こそ知を私。あゝくゝ少しの金あい
あうをもとおりへハ再び猶を洗ーて「こをいうぬ多
かの容子。勿論四祈請の次第ぬうう。陽ゝ当トぬで
ぎうまんが。を初対面の縁りのと。仰ぬ壁不似合。
まうこ長伯日祈祷あく。箇程不縁りのと交納の
義ハ。ぬ日海まを。こをハ四辞退まうしまんト
却迫さまをる遠ハ。方を天意を拵きあうう「イヤ

ぬ方振不安仰ぐぬ。金ぬでハどざうまうせん。勿論四
酒のお夏ぬ。親へて為る。書。チト主方でどざうまをうう。矣
見縁あげうその猶ぐ。さーとこのゲあハぬ。陳をまくゝう存
まをんぬ。を処を砂方四方先。あさをこて何卒彼見
あく。お交あをのて下さうまー「まくあ向てさー虫
世ハ一変ーて方振ぬ祝ぐぬあいう。陽り交方くゝ存を
るうう「イエサ交方を。をうまをん。私ハ彼の為。主
人ハ陸方他日移ーと。外のとをどざうますまぐ。見

式の事御申。此ハ紙ハ御ざりません人不食無之御注
ぶ。紙をくゝらち膳を一とり夫ハ主人の家来ゞ
西であらうと。扨不陸童屋落と。その一名別申ごゝろ
申。儒のとあらバ夫申仕ぶ。お形この祈待と。定
あて呪詛ろ調伏。密くの事でござらうまゝ修験ろ
不ぶとくの。修法申あとバ係不ぶてハ。政をまいりの
ぶ申あいゞ。家賓院ハ金さ〳〵半ぶ。行相ろ祈待申
ぶ不ぶるとの事ハ迷惑。ぶとも申ぶまゞ〳〵この

品ハト墨をさてまて百姓ゞ。イヤ主ろ相ろ申ぶ。あいとの人
くハ沈ぶ。此まとぶ。所詮ろ明け。此まんと。揉をさて
あて不変不ぶり。一ハ不申ぶ。半傷ゞお案一通ぶ。滅多
不ぶ申ハ事ぶ。一件。然一あゞろ方ぶ申。極内くの
お形ぶ。筋。紙合ぶの相ろ申ぶ。あらうと。半傷不ぶ。
こ中ぶと口外をいゝませうの。夫ハ。深不大丈夫
ぶ。相ろ申ぶ。証文ぶ申。ろ形ぶ申さ入ぶませうゞ。
承知ろ申ぶて下さりませうゞ。「左相サ筋ろ

馬遠
名人
呪詛を
たのむ

こゝへトその瘴沢のこゝろ〳〵ゝ私ど。他の知つてゝる高家と
吹て。忽ち發る大狂ん。る造いつゝそのて一左根るゝぐ
まづそを。お収めあるのつゝそ跡で一左根ゝ子ゝゝ
あゝ。更網いゝそでごゝりませうト懐へ見あゝ。
探つてゝる小五両ゝ。呂人まゝ泥濘つゝて。赤い眼
細ゝ赤〳〵。手を打あゝ〳〵人を呼び。何ゝ密ゝ低
結ハ酒ゝ料理ゝる造ふ。振棄ゝとゝる。ゝ
トキニその四祈待ハ何根ゝ。まゝ四石あゝ四箱

新。ゝみ。まいつてゝのゝで一いゝ丈ハ四丈。サテ
まゝ翔ゝ四丈知のゝゝあゝ此方で。極閉ゝの義で
ごゝゝゝ。祝へ洩ゝ一大事。ゝ猪の方へ何根の。母
ゝあゝて口外を。いゝゝまゝのゝゝ祝文を。あゝ書ゝゝ
此方へ。まゝその丈ゝの四中形付。ゝゝゝゝあゝ
まゝゝゝ一丈ハ就き出れ結ゝ。ゝゝのゝ。何ゝで
。ゝ〳〵何根ゝ筋食ゝ。その翔を。ゝ吹まゝゝ一
長根ゝゝゝまゝ。実ハ主来服學ゝ。ゝ月ハ

外あるませぬ。何様うそ偽の出家法で。隠居いて
せぶをまこと重宝。モシまうす丈ぶ暁後くハ。その母子とも
病身不あるて。一人あの級不こそ。ぞうあるとぶ丈で
母子。その二不一のうち。出家新樹あさまと下さるまいの
一つハ、まて左様でござるる。丈、表様とも修法不用で。
出来あるあるハ。ぶ。教をこと中せぶを罪深重。二ツ丈あるる命ハ活
人。病身不いるんまぶ。まうをるとの罪でもあるを

処いらでいるませぬ。ぞうあるとて。造不肩を傾け
いるるるる。イヤあるる病身不あるまを
ぶ丈で宜ぶまうまん。丈あるる悪僧も教宜しの教生
戒とまをまうち。人を教をぶ最才ぶるる命ハ取をるるの
教。あるるる丈不して。供物祝明粧香ろ。日くの勤
行かをこまぶ。この位ハかるをまをうぶト指を三本出
人丈をまぶる造いこをを丈て。「をまを病ぶとうる
不埋いを。位云三百ぶ五百でも。お教をこ中ん稽ろの

私ハ〳〵変わり紋文を。さし上まをうとの仰あるゝ。腰
の墨斗を引き出し。俵をむすびて手拭まとい金曼も
まくと変わるべと。実不ち入ると一通の。巻紙の紋文
ありて。持出る者りけ方も出来。俵その表紙の肩
出ず。雪の下茶所大変風。百遍ありて。互
不拔く紋文。金曼ことを後下仕ハ。生年十七歳の女子
脇字。母子一命全ことのゝども。恐地病気不あるの
後法。俵変生俵へ形こと入ハ。お供物その外の料として。

金三百両ハ相定め。今日金子百両を。後日の残金
遠孔あるべうと。手ぶり。その内百遍金曼ハ紋文
をとりことを。つくるハ別義あるべうざるとも。供物その
外の料三十両と。あるハ早欲也の。藤忍をハ不
悔るべう。金曼莞示うち笑ひ。金百三百両。
イヤ見あるまゝ恩俵ハ大変。とゝ中をめ。ハ不過ん。
とゝ〳〵お徳め恵さまて。ロ中ハ〳〵ハ。先彼男
の手ことを見て。後で手あい三百両ハ。ものくと

ふるのの上。殘念あることゝてげりこと。仁程不五度の十度
目。後悔さることゝ更不詮なし。百遍ハ殺けるゝ。仁不ありて
手を出し。大史取為者の海へとり出
酒と穀を拾ふ。玄米ことゝを盗ふ。百遍ハ食
殺す。當く聲を巡らして刑半金をきゝおきて復
ふらち書り落書ふ。名誠を出て帰りけゝと

第十四回

おゝふお耶麻い鳥吉ゞ紂らひ。狗の半走しゝ。

ゆうりいもくつぶ牙のと。腹中の孩児ハまゞ海とゝ川と
もつゝ猪児あり。任宗このまゝ不墮胎ゝて。然のこと
ふ欲くこもあく。あの背と明らあ。仔細ハあゝれこと
あるとゞ。あゝ是ハ某を人知ものゝ。勝せらもて身を逃
ゝぶ。欲いても逃ゝれと。何辛ゝこの危さを。道伝
絵方ハあいゝもゝと。ゝ〳〵ば胞のこと塞ゝて。慌ふ仁
石案いつゝで。今とあゝてい鳥吉のこと。侍ふ仕ふる侍
牌でも。んあるとて気ハ易ゝゝで。何振ゝあゝと鳥

吉のいへ。產おくるまで陶綾の方へ遣留ゐでも往と
ゐ。美吉郎あるべきのとの。妾婢ゐあ」と報舍。ひろく
よく物おりゐ。ゐうゐト女ゲ執次で「アノウ米勝さんと
ゐて鳥吉どんの内義さんゲ糸ゐうまゐト呼てお耶麻
ハ龍立つゐひ。家ホ日あゐで莞示と「ヨヤ吉郎ゐよく
来ゐノウ。米勝さんゆハ例のゐろ。ゐゐくひ方へお出と云
ゐ。そゐそお優多嬢鳥吉ゲ不日一新ホ来ホと早く往て
吉郎云ナ「ハイ〳〵ト応ゆ〳〵日ゐく。米勝ハ先ホゐ」

子へおゐゐさん呼〳〵ゐう天遣ゐゐう。ゐゐゐ彼ゐて四帰
ゐ。ゐホ在ホゐて日。ゐ隙ゐ離ゐて居ゐゐう。ゐの郎ゐゐ
と五月日十日日。お遊ゐゐゐゐゐゐゐゲゐるの日「ホニ呼ゐ
ゐの月ゐて物月ゐと月ゐゐ子。今ゐの処ゐう来ゐゐモウ幼ゐ
ゐく祇ゐゐゐう。ゐゐゐ耶ゐ麻ゐ女のお子舎ハ
遊ゐエ「ゐモウ手処ゐゐヨ。彼女の子ゲ出て居る新サ
「ヨヤまゐゐホ日寺藻ホ庭ゲ「ナニゐゐ更ア明ア
のホ中遊ゐゐう。ゐ郎ホ更ア会ハまアホ子食ホンでの

お庭を出て行。何かもあるあの音樂どもです。物りまる
位どものヨト騒ぐまぐるふ子合のロ。まうと逃入て例の
通りと。子務八案内も憑まを。障子を開て「お耶麻
さんは様げようう」「よくお出ぐ子へさア此方へ。アノ鳥音の
女房の。お優美ガ一所ふ来てさぢ更アあへクエ俗ハイ参つ
てくれ居ます。「左様ク迄あることを来る。おうと云迄
ク「「お寝さんは きげようう承ります。此迄ハ法。
丈夫でございもう「アくちつよも移るるハあへョー吸

てお優美ハ人ちうを。物あを御法んばして「丈ハ迄ようう
ございます。よく鳥音ハ容子も。妻ーく来て八銭
ましまぶ。何をやんも雷の為。何ぐうも届きません。
おまちうく移ます。新へ陶器の見物さうう。私と事
物さんふ。一寸参ると参のお彼。何ぐと移ぐて参り迄
ちう。見物さんの。何ふいお耶麻も腰掛ふ参ること
ちうぐ。屋敷る表い初めの。の参ろ。赤年の種物あ。
ク。沒て産赤ぞの勝手ハ参ぐ。そうも先方でも

坊主ありの主屋るでゆまあらうけまと。別深ゞ落くゝ
ゝを忍ぐち。丁度鳥居ゆ飛処不居るとまと新りゝ
手簡ゆ書こゝつ。早ゝ不淮彼をして。お耶麻の方へ行て
呉ゞ宣。宇太郎い玄年ゝ。自ゞ情不別深ゞ居る
ゝ。ゝ祝いゝあひが宣とまぐ。私ふいゝの委ゝ一ゝ処ゝ子
お耶麻さゆ私あゝ。お優多一個ゆ宣けまど。何ぞの
時不商議対牙ゞ。あくゝちゆ囲るゆ。猫不鳥居ゝ
ゆあらうあゝ。年勝えをお教とあきつて。何祝ゝ所不

書てゝまるゝ。お計らひ下さうまゝと。ゝこの通ゝ不手
てあること。ゝのお手簡をゆ見まゝぶ。何ぞ鳥居さんゞ用
義えを。急不ゝ書ゝでゆ成ゝゆ。ゆ不淮彼をして半時
ゆ。あく紙ゝ下さうまゝと。丈ゝ顔ゆ不。急いで紙ゝ不
さへまゝゝョゆゝ。お優多さんモウ帰わど久ゝくあるゝ
アレサゆ麻をお云でゆあゝ。ゝゝ夜アおお十年ゆ。十五年ゆ
むゝのゝゝさゝ。「左祝ゝ。まア丈ゝてゆ。お優多
と遠ゝて年勝さんハ。毎日贅古ゆあるぞらうし。ゝゝと

小新茶椀といふものをこゝに出す。是こゝ出す椀のことをこゝに用ゐ
ゐるものなり。

十二

是も因幡さゝゐ出れ在あいこゝ。
此方不居て稽古をしこと位い。自己ゐ者ゐ居るこゝ
と。そのあとのお椀お茶の功で。行こゝろて入ッきる。何
もおお椀さんかとと。四苦労不拝ぞ〜まんか。ヲヤお茶
ゐ出来とのこゝ。その通ッと急ぎまして。お家異のごゝい
ちせん。そ代ゝ不お茶菓子の。甘美のゐごゝいまんあこゝ。
迚お出て拝ぞ〜ま〜「ヲヤぞこゝもあの何ものあい子「此月
まゝを稽こゝゐ。迚ぞ。迚ぞ形廣ぞこゝ。此夜食不者ゐて
あるものと。今ゝあるのハ有者と特羊羹ぞこゝ。何ぞまこと
面不者ゐトいひて。そ処笠者をこちつえ。「モウ鳥音も
帰りさこゝ不ゐのゐ。史とも角のて子会不居ゐこゝ。かえ
ハて者史トもの親さ〜稽こゝ。ねゐ。鳥音いとを聞て這入
ゐ「ことゝ〜笠勝さんぞ。也迷惑でありませこゝ。茶
ことも同縁と。ゐあてお異ゐ世。こく〜者てお
異ゐまゝこと。まこゝ妻ふこゝ向ひ「こく〜者こく〜

位が出来て。自己ヲ今日いまゞ来めゝ帰ふのうち
明後日あうふ。あうわ〳〵まゝ史ヲ空とろう。何様ぞ宇
太郎殿が跡を追て。一所不住うと云ふ〳〵わう「何ぞの
早くといふ。さうの何日か日拠を出て。恵ふ出て来ま
あこのサ。宇太郎ハ良様さあが。可あどてトさうう都て
吾儕どりの居あの方ゞ。脇わど空と云て居るッサ「吏
でもマア男の児ぞノウ。まゞ湖く八巣ウエ。彼ゞ女の児であ
つて四歳。恵母の様ヲ離ヒいふあ。そをふ彼児い年

ふ似あり。年者日さうく〳〵。本ふゞ日さうく〳〵。モウ
脇様あげとといふ。孫ふおあ様ゞ〳〵ハふお侍ど。今
ふ空ふ恵ふおありぞうトふを賛ふ。釈ふ。共ふ
嬉〳〵ふひけう「烏吉ヤ先刻のあハ何様〳〵ヱ」
ヘエ。食注文ふう。尼つけて仕まひまこと「方様ウマアそ
ヤヤヤア空つこ。手処で学猪さんとお侍食ふハ何を井
味りのを取て。四孔を〳〵そおふ恵。吾儕ゞ初のふ
ふあつこう。世俗をふ来ことふ。何様ふ四孔

こしても宮ハ「ヱヱヱ夫ア来て嬢四主人さま。何の四拾ふ
及びませう。筆揚さんこそお気の毒サ」ナニ〳〵こまつ
墮落ごろ〳〵全体向のゞ自己ゞ傍へ来てゞ居るン
ゞア「アレまアお吹抑の法エ。誰ゞ墮落ふあるものゝ丈
とも思ふの二月婦人。五両ゞ中あるまゝ。ウ濃と思優
美さんゞ。サア〳〵手拭ふ取る麻を引ぱんと。円義さん四
孤光の注文ゞ分対て金を差こ来てあ
まり「ドン」左根ふあうト二三人ある。狸女ふを用ひ

つけて。皆くこを差ごみけ。三度四人額をあつせ。此
程よりの高体まこ今日物の見のゆまゞ。結ふく結
ふて拭共ふ新見あ〳せて呆ふとまこ。酒ふを吸く
ゞう。さゞ見ゞう吾ゞ女個私〳〵て屋到ひあるゞう
あ〳ハ。箱ゞ中さまこゞ〳〵ゞ。さて〳〵涙ゞ云ふ中ゞ
こと。結ふの中親への。敷ゆ来ふ〳〵ゞ居て。ゆの〳〵階
ふ不酒と阪。夕胸ゆ海て両個の女ハ。お情ゞ子会ふ
ゞ。見ふ果の分対て。耶麻ゞ見の分抱ふ。来

おやま
鳥吉
鞍掛
お優
浅倉
未次

うき
ふじ衛
おうら

ゴ〜中を拾ふく告在所剛〜不時刻を待〜て。実刻
おそろう不帰りし孫へ孫りと来ろう高造が四方八方
〜不安ノ。花紙へ包て寂寞院へ参る一位一件。精
く祈り「コレ四郎どろう私ゲヤきれ母ろ。ア鳥
吉厨ゲこ乎計らひ。茅場ハ友方へかろう安くろたころ。
労の服を母探るこ。呼まろこ不遠ひ来い。依刻
あって人まきまきび。両個こ個籍の月舊の月。最ま夫
所徐ロ元の。不拾ひこ〜ぐ達ませ。大ろ〜ひ拾ろ〜ぐ

らろこ。かの芸藤法不ろう。大出来をいこ〜まろこト
いて待ろふいんを吹「ホンニ左根であろこの。鈴あろう
老茶さんへ。何と云て金ゲ来こらう。吾俳の仕方ゲ怪
ろいろう。お耶麻さんの傍不居て朝不晩不気をつけ
やうこと。云て来こ〜ぢゃアあるまい子。芸左根あろこの
根不。吾俳ろう母こきとあ〜不。手方母でも待て貴
こて。何ろう云て亜あいとろのろ〜四芸不何根ろこも
吾俳の所為不さきろこ「ナニ〜こきく些でも。

あんぜ和尚及びません。お耶麻さまとも考察でも。
ぞる 因縁さまあいこの四実ふ。なてかとそひまてその。文を
直接ゆさまとませうこまうしーと訴が因縁さまが。美面ふ
ふみ 語へまさのません。そまたへ和紙苦労といふりの。さ〜構ふへ
とぎりませんト低語おくて出てゆ〜

嵯峨廼假寐巻之七終

雪廼耶麻 嵯峨廼假寐巻之八

東都 松亭金水編次

## 第十五回

かくてその月の果教あく書て。春降月の初旬とあるまでお
耶麻い感冒のふ地とて。一月二月い孫こう紀こう。然までのみ
ふいあるまで。とふひこうーがゆ五月ごて。右ふ左才骨が痛
むとのふあど。まぐその熱の肉攻ー發せね放ふありねべー。
平生こふ遠ひ胎癌のエと。大事のこふふも大ふのとこう

人。お優美い疾の病ることあく。身動きれさ〳〵ムをつけ。
いで寒けき冬の真中。風あく夜ま い程きろに。寒さ
身ふ凍ぢろうあるとぶ。犬猫の火さ〳〵気を死ぬて。分抱
い等宋あろ〳〵ぢ。鬱師い教年この家へ出入る。半井順伯
い年齢も。五十有除の人品よく。療治も殊さろ功者
のうを人くもひりて雑せぶ。ぶ程ようその人を形とて
炎茶をも用うもど。さ〳〵てその張も有。然ると張痛
熱気も有く。感冒ろとあり〳〵ば感冒あぶろ。常のふまと

別あり。丈夫ぢつも業ど苦し。用あき形ハて不来て。合
ど手茶を勧めあどしの。まくと程く訪ぶべき。多乃昊その豚
の地あど朔へ。気を時せん〳〵拘まとどお耶麻い兵管
気を用て。ぶで病ることを好〳〵。月光し時い医後の痛
ミ不悩む得ぢとれ病気形ろろ来る半井順伯。侍女
どもぶ業門不つと。ぢ処へ逗入ぶ「イヤ順伯さん毎
日〳〵ム苦労でぶいまと。何程ウ又ぢ祈ハ多波
ぢ。病ひの平ろ不ぢ入ぢまとが。全体何ぢぶいま

せう。感冒ぐらい世話遠くやう。何ぞ気晴しにでもなさいやん
ろ子。兄の方とも仲ぐひますすろう。何卒ぞ快方なさい宜
ごぜいますが「順」さあ〳〵私も稽〳〵不考へて。実ハ力の
あり〳〵うけ。骨を折て居ますけれど。病ひが実ろうと
おり〳〵虚お脳も浮沉逆教があつて。終家ぐらいさんとび
不遠ひ。誠不困ると雑庭私も遠者のふで此年まで療
治もいろんが。何程も効いの出病人ふ。まぐ出会ことがあ
いま丈あるぐ出大病ろと。や世ぐ左程でごぞりません。初めい

外邪も見えまるぐ兄今ハをもも宜敷。やさぐ力鞭の
中此処ぐ何程とや中を新いぐりません。丈でお悩ぐ云
ぐるとい何ぐ考へぐ見ません「丈ぢゃア何ろ子順伯
さん。病ひハ些もありません「順」左程サ私ぐ終家ぐ。
見とのよお病ひハ治いろ不ふひます「ハテ子をもぢゃア
何程ぐ云ンぐろう。一向訳ぐコろりません「ナトいひて妻
時考へて「全体この女ぐ脈まり内端で何でも悪ろ
をろよくと。気不ぐるのぐ持まへぐろう。ぐ程ぐ加減

ゐるまいません。脚や腰や脊中や腕が痛むとゐふのは
何でしらう。矢張気の凝といふ事ですか。「順」「除人」左
指をきませうが。左指ゐふ狭とゐふ遠ふませう。勿論風
毒痛風あるが。潤気の痛むものでありませんが。全く毒
赤義でありません。「実」不義赤病気さう。「順」「玄
う」あるう私が限つて左指ゆとまとめが診ます
あるう。その病気をかまはせうが。何あるう表へお出入の
婦人のおを診せあります。「左指サ」左

仕たつてませうが。ゐふいふ変りお耶麻ゐ記るう。「玄」私ハ快
であります。翌ゐう記ますヨ。義まるお薬を飲ますのあるう。
何卒順伯さんのお薬を頂きませうでありませんが外の人ふ
撰ばるものの。決ふ否でありませんが。「順」お薬をあ
けあのでありませんが。実ふ考へ様の出容体が。私ふ
かりませんが。因指へ今の要ふ中このでありません。「丈」
左指ゐふあるう誰ふ診せて。同じ多てあらうう。
順伯さんのお薬を飲ませ。補あつて居るが。まと自で

頭痛がするから「順」「きのうあるいた。十月廿日
この俳句は拾遺にあるこの句でも蕉門はいやがらせん
文とも脇まりは難ゲニ痛こまんあるこを拾ふ。貼薬で
もあげませうトその日の葉を頭食して。順伯は俳る
りどれ。文をあつめ汚れつまて。奥ざ紀へとこち俳るこの
次の間ふて吸居る。華翁はお俳句を拾さて「おあ
今ふ函若きなの。お云ふまるこをかゆ。うエ「左拾ナ吾
俳句こ気ふあるこう。金俳見拾さみゲのこっ言葉こと

吾ふ種々お吸ヤきうと。ふつこともありまることけまど。
出ること奴ごとふ「左うこと文で五吸をして居このサ
「吾俳ア俳句四容俳ゲ。可咲クと思ひまこふ。何故と
ふふお彩気もあ。お病ひ気はあいとうこふ毎日
お塞ぎあまうて。然して徐方身骨ゲ痛いと。紙作ゲ
気ふ含ふへヨ。おあ八の拾お思ひゲ「吾俳もそもゲ
気ふあるのみ。いづまこと気人ふ。今日の寝ふを彩ーま
せうト低こかこまるその所へ来る鳥吉ハ不審新「何ゲ

うら表


うら之

お個して。何を言はふ。よくくして居るのじ。「マア お安
あきの何を祈ぢやアあい。今日お逸青さんがお出あつて。丁
度良おきさまを入らさつぐ。彩〳〵いつお彩〳〵サ。何ぐらぐら
申更ぐらく。今お個でそのことを。苦労ホーて居まそのサ。「
マア鳥吉さん何招いつんぐらう。吾俤は三三文子供の
事ぐぶ。左招いつんを入へあつません子。「そうそ申お。彩〳〵苦ョ。
ハテぐう申更ぐハエト妻時統組考へて。居ろーーぐ入点
鳥
改「まづ此方で張へば。そまを申更法彼人うちの所為ぢやっ

あのうとうつんぐ。何を言招ふぐいうう何処まで。振法くを
為狐申わへ。ふつんぐ人のふい。何招いつりのうか祈ね。マア
何あろ些と早いぐ型天気あうとのおふ舎の。大掃除
とやうきう。「何れおお今ッうう。「鳥祈ぐ言ぐ処ホ話向
ありサ。「夫あうぐ右申左申サ。何うエ今年の悪い気を大掃
除で掃つて言まのて。陽気を入るとでのつんうう子。「鳥イヤ
十二左招いつ彩でのわへぐ些うう法ぐあうのんうう。食ホ申さう
云て。早く記て准備をしふ。とか付てお呉ふせエ。「何招

のんでから知らねへが。是ぢやア今夜にも食なさへ。左様
まうしておくれなア。なるならバ　鳥「オットよし〳〵今夜から三日
あとを云ッとあらバ。金言でもとまつて大掃除。何の拵ひが
あるものか。膳に夢から朝になつて。お耶麻さまをば因羽
さまのお座しきへお入れまをしやさう成られけ朝まで世間の人に。
知らせへやうにして。急に初めるのサ「何ぞうマア鳥吉
さんのご謀どうやらにあし　なさいト三個ハ其処を別れける。
引ちがへて入来るお橋。そをとつるより身を遠巡て挨拶
すれバ　橋「何様でエお耶麻さんハ何ぞあがりなさへ
まうぢ是でもマアお前方が来て居て置けれど。
吾儕ハ少と按下まして。お腹を痛ても美味なし。何卒
すやく騰からして。例の笑ひ疵がうんさいのサ「ハイ〳〵左
様でござひます。お医者さまのお作かか。モウさうしるは五
病気の心も見えへものでござひますが。ご当人さまハ
右に左にお腹を痛がつて。強にお困り抜なしまへ　橋「
左様エ。是だから吾儕のいふ様。酷暑にあなたら寒に。

アノ順伯といふ人ハ孫ホ下ふごと食ゞのハ史を旦那
始めお耶麻さんも伝作ハ在ざらう。国つくりの
さノトあノへ通まバ紀うるお耶麻を止めて「アレサまア居
招してお在ヨ。他人がまーハ何柏も孫かりけあハ子。先刻旦
那のお云ふさるあハお耶麻もぶんく快方ぶ。老爺塞
いでだう暮るのハ。乳ホ引立ゞあハうぶ。丁度明後日ハ
戌の日ざらノ。弟をきてその祝ひホ思入を旅考ホ仕
やうとおりハ。史ホ独て陶後ハ共爺さんを。味ホあゞやう

とおりハけまど。来てお異ホふさるざらうとお云ざらう。
他のあとも遠ハまもさうノ。来るうハ来ともせんゞ此老ハ
ホ作と云ノの取立て。月ぞもハ明るくハあうまもまハ鳥音
ぞも居るとまるこ寝けまど。見も此方へ来ハて居て。老
爺の代りとりさうとやハ作ハりのおごきハませんと。云ふう
バ方振りハ沢ホ。二日ざうう鳥吉を来て。来てお作ゞ
やさうけまど。何ホしてもお耶麻ゞあまとだ。那て四苦
弟ホホさるざらうノ。ハうそのあホ作ハを。あゞて来

さうが出らうと。まづ極うあんぜつけぶらく第八明
後日とお極あさつて不遠天あいうこう。おあまも徐々敬
度の辞して。美湯不遠入七ヲるいあうこう。まを見度のお洗入ず
左根しん塞いそ。ろうり病ると。私く病人のようでうこう
一分者雅うこざのまもと。私の左根おりひまずが分ごう
強不帳情不ありて。しで完の中へでも遠入こう。ん持不
ろうりあうまんい一分のおまく。気の弱いまごろうけが
いよ。何でも明後日い大遠後やうが。あ〜おさるとうくと

ろう。稚く面白いてもあるさらう。気を張ろうして一所
不お強ぜ。左根まうもアまを快くあるハト已ごらんとうひ
教し。長居ハ毒魚のあるう。果く不帰ようく

第十六回

かく〜型物明六ツを。おそうとれ不鳥共ハ及記き。お後
食ハさうあり侍女掛一女。ある隠うを呼親。ようく朝飯
の用備して。大掃除おさるとかこうん。妙夜飯ホーしてからぜ。
侍男五六人。そをを不明阪のあうこををようとうが上出ます

ぶまぐ家内篤と問ひまあるとれば。その男どもを伴ひ来て。
さて新服を合はまひまぐとの間ろうその沿ぐ。お耶麻さ
まのお森の者ども一数所不まるお宅と。障子隔紙かこ対て。
ぶ者あみて根太まろ。掃除ものくあみくふ。お耶麻
お寝所へ参るぶ。その刻の比及あるとぶ。筆務ハ甲
斐ぐ書く。お耶麻をまぶ書きへ。居者のエ
ぶ調交ものくふ不指出せぶ。サアあをを掃
やうと。先不立る烏吉が働きを。伴ひ男ども。

ぶ情出て掃ひ出せぶ。烏吉ハ手処なを眺く月一
ぶ掃除ハ達ぐぶ。あくハ吉併ら且形の居者一者用
弁藁ぐ世不史アあるれ。逆のエ不根太板を。剥
あて板の下の。御の巣まぶを。藁ひ度。但苦労あぐら固辞
敢ぐ。ものひ絶らぶ鉄鎚を。伺処ろう指て来てあり
めるくと引敢せぶ。中不い板の剥るものあり。手伴人男ハ
黒まとて。世間へ掃除不報まとと。るハあとどの根
太板まを。剥ととりぶ人ぶ拾めを。伴改さん形て

ち。扨て大方まがかる。最大低不こゝ〳〵ども構いまぜ。板太を
待つた引放し。常とのまゝ隅ゝ濁。拵拵しる新宅ま
と。又ゝとど怪しきことも有。烏吉いまゝ天井を作きつん
て〳〵すこの天井立派不出てまるけまどゝの意味ハ風の
糞。まこと塵埃ものんとまらう。扨て用ハ又ゝ成とも。
ゝ〳〵ばゝとも見不かる。サア見ゝ天井板を引剥して
一掃除ト咬て〳〵すゝ不安る手伝ひ。お爲ものも遠不
咬つけて〳〵根太と遠うて天井へ板をつけてハ海まい不。

モウ〳〵そもゝ宜らうト咬て烏吉ハ板を取り「イヤ〳〵こと
ハ自己ガ働。こゝ〳〵板の五枚七枚板ゝこゝ毎日こゝ宜
間不遠入る大工十人金時で来て縁ゝハせゝ迄アハ先方まで
ハ半年ある。彼の構ハ有るものゝト有る由咬ぞ応濁ゝ。
板引放せバ板不差ゝ。ゝ浮奇葉の家造不由。渦
ア安きハ塵芥〳〵丈ゝこゝの通ゝゞト一枚〳〵ゝ
拂ひ。ゝゝまゝど稽つゝとゝあけまゝ。ゝの程ハハゝ有
ゝを。有〳〵けりゝと悔ゝゞ。今更その後悔を務ゝ。明の

大工ども呼寄せける。自服の酒代ハ元来気性。天井根
太までも元の通りなり。繕ひハせずて仕舞今日の大掃除も済
けれバ、何ひとつもなき酒飲せ候へ、餅を出て帰せし跡。
華陀が修身ハ何枚か根太天井まで引放し、狂人
ならぬ仕方ぞと。誰も皆察を低め「鳥」のごとく左根の上
ハ気の毒の極を知り、何もかもつとむるなり。お耶麻さんが
此の。顔容子ハでなしきものも、何でも正真の病ひぢやない
と。医者でハないも自己が鑑定。まづ医者さんもたの

通りなり。此ばかりハ遠ひなし。第一人が呪咀でもするとなん
らば。縁の下ろ板ではなくハ、天井裏へ符を張りて祈るといふ
ことゝ。で貼るとバ、縁左根の上とでもあろうかと、参りに縛よせ
彼通りなり。あてゝつんてけれど何もなし。最とあとハ法智者
でも陳不仕るがなく、なのことゝ、抛首をもしたが見ゆて不解
「なんなる。おハ君義なる人々。どれども尽不気を揉ても。
詮方がなハ子ト、談共不萎病雅多の雲の薬。まづく
詮方もなかりけり。さてその翌日ハなかりけれバ、丈夫な

と此日より。主人を人をたらせ。そなへくの准備をあ。料理の献立を拵めとして。食自分不改へて。残る所あく分付るあど。今日新まぐれより料理茶庖厨狩ーと張るべ。びまた菜蔬物ことごとのごとく把うて。切つ割るの洗方。煮方の後後き順のごとく。そなへ置るはよりい。逐く集まる客のこと。出入の商人職人まで。こで一通りあるべ。一人の時さだ拵くあど。さーの不慶き間無く不絶合ざる席のあく。想弁あうと三百人。まことのことを受つけて。手伝ふ不来るものの中あり。さまざ極婆さの中。二人まで拵い。陳同のあのあるいは毎日夜交替不結切べーと教こ受え。教多の金をさてせけまべ。婆者ハ切りく教びて。そのことを承知あ。さて今日の纐帯。形のごく執り方バ。耶麻ハかくまで丈ちつぐ。教びの膳を拵入を中厨べ計らく志新向ゲあるとのくさ。びるの中。昆者の食ありける。主とのく中物とあく。日くく不塞ぐを苦不ずて。偶形日あとあるバ。拵くて乳中晴あんとこどが才をかりく

伝実ハ親ゝとも有難き有難さん地ハ平生不変ゝ私
ど快き振をしてゐんせこそ。然こそ歌びかりらめ。と
進まれ身ハ変化振りて清らゝかありけるに業に
ぐそんぐ丈ちのこの振ひハ乳母宅きゝやとお耶麻ば
子食ハ来ると「イヨ」お化振ごとく出来こ。今日ハ何
振ご芸ハ快ゝ。アレ彼強ぎを堂出て見ル。モウ今
酒を出ゝこゝ。ゑハ振ハ旅て来こ「左振サ大
分振ハ来ハありまこ子。何ぞ晩ハ芸人でも来る

のでどいまんう「左振サ芸人とのこと新ぶ。ア強ぎ
勝ゝて見ん独ものハでゝ世新ゝと又切こゝ。お内人を二
十人ばかこ手摘ゝで。花水揚へ云て生こゝ。物ハ
今ノ手伝歌枝の来こと手ハ行ゝとヨ。丈で稚ゝ手間
ゝ十二三人伝あゝ。俵とあげまんと云て紙ゝ大ゝ
今ハ来ゝこゝ。茎屋町へでハ知て生こゝ。清ハ大
勢あゝけ見ご花水こゝ陰ご遠ゝて知て。逆恋を
るごゝゝ。マアゝゝとで振ゝ簡振ゝ合せて伝

乗のサ「その位まの」こと。位かを見で海まをうトいつの
時孤茶る小使男。義長の外ホをとあて「且れさあ花
ホ指こ「ホ丈勢ホまこまこ「左振ウトあう向くその所
へ業間日まこ「ビ動也くこと「且れ今月ハ元ごこう大きに
至く赤ゥまこと「イヤホ拝ひで四苦労く。ホこーホ化振
ホ点ダ入こ。離也際ダ西ハのコア去こ相ダ遠ハく。サア
彼方へ往こ。宅招ホ呼て呉ホ。コウ〳〵そ史ア宅ダ参く
ホ陽ほん坊ハまっこホ〳〵ぜ。美主招ホ老ダあるこ。主科

を取ることハ人ホ仕男「ビ宅ひまを。サア美ホ〳〵
彼方へ往ウトこホ行こ。孤てやく「おン二活業こハ
ビホ赤こ〳〵ビ。食奇義で。そーて気気でごこいます子
「ビ史ア物こ云て。素人こう坂抜て振らッ系。何振ご
世素人ホ兄弟〳〵ウト今月快こ家勢ホ丈方つが人の
程。手洗振〳〵ホ〳〵ホ〳〵。右左こる行こホ日日書
けまビ。間毎ホ洗主物素。い義明まビホ光こ輝き。
見こウ也ホ明けまビ。ホ耶麻いホ優美を伴ホひ

人。彼方此方を徐くと。歩行々々奥座敷を祝いてゐる
ふる席い祝敷縁起のよ客あるとべ丈ちつ日を処不来
人。客を歓待の情あり。お憍も在て義西を弱つ別へつ従
客姿的ふるとそ人之法を。拵とうて弾出た。その客更ふ
花水のお酌不変るとも有。お耶麻へ呆まて。お優美不
低語。彼りん気不あつてべ。仏の招ふ面白らうふ吾
併いの級まア形強気ごらう「まつまつまと。お持きあへ。
阪まりでこぞいまんト待つて有ごふふ会へ帰る。さて酒

も十分とて。就て間毎不服部を出たと客へ行きうあて。
出入の職人為人まで。こ系各二の根付。お料理へ根
めくと。いそれぞうを不悔と呆まて。美とるこも意味
ぞうを。崩まつ。猫も有のごうう異まうて麻布とまうし。
ぞその塵を探ものとう。彼て中ろう級下の人ふへ引物
の代をとうて。白本の木具不用縁色。まうひへ五百匹
二百匹。二百匹を下と系つて。猫くの茶不ありけべ。いりく
敷ぞ呆ぞ。ぞうう。ふく不於て限ると有き。泳ひき上ア

長酒の俳あるのも切あげて。こゝ本竹窓不統と迎
ひ。くゝ不立帰まべ。さて更ようい家内の男女。こゝ目あ
ゝ。く料理い遠いゞ。婢女小奴不ゐるまゝで。祝儀をそろ
せ寿ぎけまバ。実不栄花の絶頂あて。嬰児いりまる
果報ゞと羨くこゝろのねいあるりけゞ

嵯峨迺假寐巻之八終

雪迺耶麻嵯峨迺假寐巻之九

東都　松亭金水編次

第十七回

却説大変ゞ方つハ。稚くゝ不ゐを竭して。お耶麻ゞ病
ひを治さんと。金銀の入用いとゞ。既不着弟の祝儀
加と見ゝ三百金ゞ。ゞ費しゝ。ゞ旅ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ
ハお耶麻の快気不ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ
ひの外。見ゝ不重ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ

ある医師をうちまもり。陰天にあの早駕をあて八幡の療
治をさせども効なく弱しめ給へども
いよ〳〵ますます烏去にいで愛へ問えて。且書按じ日来よ
ど。仏あせる神仏へ立願あて祈りけりそれ神仏の
利益ありける。陳不人の信不憑ると。実あるべき事也
是。彩五の年とり加り。睦月の末旬ありおよびて。その比
よりお耶麻ど腹こそ。いと張ありけれと。元の方へ却て
快く。食事大へ平生ありかるべきなれども。なほ不治の病め。

烏去以下の人〳〵。能立ざるを不石教び。拾大切ありの抱ず
を。以あるを名誠ある寂寞院にその比より。丹精を抽
ど。細状の法を修。殺をあらせてこのうへ。大金をも
貪ぶらんと。行膳を搆きけれど。彼こそお耶麻ハ渾身
疾ど。決才不重き体ありしが。先ず逆名誠ありき。
食量小量てこのもどの。容ありあど。猪るをう。食量ハ歳
の書ど。人用の母まあるべ。そうもの虫。約束あるハ
渝ことど。一体おあい二百文と。気得るを比方ハ正直。

三十五の新婚料。是ぐ使ふ十分一。あり。吾僧ゐ骨折い。
殘金ぐあい稽らるれ。氣の毒あぐ。今三千兩貸くと
いひる迄が。丈い初まる約束あり。既ふ吾僧ハ三百五
と。紙文ふまぐ書くわぐ。それ中央ア仏和ハあひまども。今と
あつて三十五の陽金ハ些むつ。丈日十分仕とるあり。
きて右日左日と接拶して。あつく貸べき容ふ日ふ。
寂寞院ハ雑方あけまぐ。丈ふ後ハ氣日撰けて。修法
日意り揚ふある衣ふ耶麻ハ次才ふ及つき。ハ地さ自然。

よき方ふ弘くあり。一体かる大幸を形く。三十五の婚金
をいとも怯むべきあり。紙ど。その通りふありあく。
現ふ鳥表者ゐ伝ふる。神佛の冥助ゐて。さふふ人ゐ
所為ゐあるまぐ。かくて如月の半ばいまぐ。陳老日
をづきねて。紙婆ハこの稽より。交智こふ結切ゐ。孟師
日月ふ雑かるゐて。お耶麻ゐ容体を候ふふ。大うこハ平
癒ふ。今年ハ常より暖氣ゐて。花色の氣色日葉ら
ふ。梅日向きハとく蕾まて。彼岸接の稍ハ咲く。ゐ後ぐ

由を受けまゐらせ。人の心も落立雪むし。書生猶ほも春さえ雅
な。多人出て發生の。乳を失ふあらべくとのふ。殊ほうであるる
お耶麻ゞ分。ことほ招くる係書いあ。今あー日を送らば。
出るこの恨ふまで。僥倖別莊の庭の花咲かりーよ
察安の。まゝせもあまべ彼処へゆき。乳を賜させんと丈あ
ハ。おのひ立てお耶麻まゞめ。お憐い勿論お拙お蓮。こ系
一回ほ佳べしー。別莊ほ行淌ハ出入ある料理屋ほりひ
つけて。彼別莊ほ運ばせゆき。ゆい北月の二十八日。花の

宴をぞ催しける。その日ハ殊ほ長宋ほて梢の花の笑のこ
ろ。椿海棠連莞躑躅。今を盛べとこゝ香を爭ひ。池の
色の青柳。そよ〳〵風ほ萌出て。まゞ春淌ー淌みど
り。八入の紅葉ハ紅ほ。松の常盤ハ一吉日のこゝまさりゆく
梢のこゝ。実ほ留江の沖の文ほ。かく〳〵ありゞとこゝるだろ
う。殊ほ別莊の庭の廣さ。数万坪といふを知らぬ。藥
山家水ふんゆこゝゆて。さて流れさく。新くほあるこ。或ひ
ハ阿屋菓家の亭。こゝほまく〳〵の眺望をありて。ひとび

こゝに来るもの。飯を忘る風情あり。その阿屋と亭
と春ふ。花の山の気色を模し。芋煮物の田楽。豆腐
お市紀夏の。菓子を赤くゝ。その侍ひ皮剥うゝ九年
母を。蓋ふ藤ゆて奏うせあり。或ひハ菜飯豆腐の
田楽。おでん焙酒竹林麦めし。鮎更級屋の屋敷
こゝをもくふ帰ゆて。こゝハ侍女仲居の女。裾
まへうけ一客ふ。拭ひの手拭うち冠ゆ。中ハうゝ茶
屋出休所の角行燈を出ゝ。床机をあゝ八ゝ戸

の大入茶釜の下の煙る日奥あゆ。こゝ丈あゝ弦向ゑ
ゝ。孫ゝ〜ゝこゝを競ふ。ゆふ於て お憐を指ゆ。お
好お蓮ちゃゝ中さゝあゝ。こゝまゝゝとうち奥ゝて。已ゝ
ゝの進ゝ所へゝ考て欣合ゆ。お耶麻ゝて誓
筋より下ゆ。お優美茶猪ふ律あゝ。ゝゝゝ
と立めぐ沸ふ。実ふ立ゝゝを筋ゝる。張向を引ゝ
感ゝ〜茅猪さん諫ふゝ。気ゝ〜ゝ。ゝ
八田表若ゝ。ゝゝ所ゝ孫ゝ〜ゝ。ひ張ふ花

おこう


おまん
おけう

ゞ沢山あります。然してまヲ三くゝ茶。蔓ひものゞ出て居ります。
漆木かのひつさゞ丸ヲあいう。吾俳由急ぎあう行処ゞ
茶て。何ぞ強う甘味うらうあこ一ハ種くゞございます
うう。お毒木ふうあいのを何あうこ。百あゞつて出後ゞ
ます。まア〳〵そう処の茶屋へあうけ強ゞせ。大うこトいお
脈ゞ由ゞゞいませうトいひ〻そう処の茶屋の方一変女
さんお茶を一ッおうまヨ一ヲ茶屋様さん。ヲヤお嬢さん
由お後ゞどん由。サア〳〵ひ方へ入ッ吉ゆいま。ヲレサそう

処ハ茶でいけません。お茶木いうませうウ香水接
湯。あんゞ由お茶こ次茶木ゞございます。何ぞうれて
茶様さん。好〻津戯ゞと存くゆ。あゞ悪くッて参り
ません。一こまサそう拾木笑つて居ゞこ。何ゞ木
くお出し木ねエ。くまゞ強めい接傷ゞ。そくお脈と
お呉木さい。吾俳ハ香波こ強由きうが。皆くあつて
あの多木。悪猫の田乗七八本。持て来て四木戒せ一サアお
耶麻さんの悪猫ハ。漆木甘味ゞございます。然して お毒木

いかりませんぐらう。一ツ石あづつて四流ぶ。まゝ「ホンニ」何程
う甘味さうぢ。お優さん由一ツ猫て見ん。然ゝてこのお
茶屋の変女さんが由おやつナ「そうぢゃ」アそう稼うで
ぢざいまんと。その内姫由出来けさ。こを飲み泥方
八方を。眺めて居ると。前へ勧めゝと来る女連。
ちゝと居るよう弘よるお稼ぎ。小袖を屈めて「お耶麻
さんよくお出なさいまして子。何ぞ旦那の出張向を。
お変物を。お按ど。ぢつくりぢゃアありませんぐう。私あん

ぎアト思ひのて居ますぐう。稼ぐあめの。を猫て。お稼ぎ
切あいあるどが。あるまゝお耶麻さんがのあいけれ
ど。業務さんソレ。ゝが。アノ竹林麦の出猫と。然ゝ
てかたんと。酒を。ちゝと渡猫て出流ぎ。夢て歩めの
ちゝ遠のて子。殊が甘味ぢざいます「左程ぐう。変ぢゃア
猫てオ。ゆうゝ。ヨやゝ。お橋さんお蓮さん。食の出連中を
ぢ方ぢざいまして「左程ぐう。エ。ぢゃ何方ぢざ。ぢの
て。猫方を探ゝ。ちゝ何程ぢエ。お耶麻さん例ぐう。豊

さタこれが勝てくらう。何ぞ拵て おいんまきのうう「ハイ蕎
麦のかやんを」橋「ヨヤ 否ぞ更ようう。お鍋ゆでも有まう宜
ふ。こうう彼へ安宅の松ろう。取ようとこと云ひまっけ」「と
ぞうう おあの根。見うひこと屋敷だ。代呂物い極つて居
まさタ」橋「コウ〳〵 食ふ呉ヨ。今こと是第次と見ぞ女川菜
肴とおやんの見世ふ。かゞシ あまさいお客 あまこと。是ふ賀
を出て 来ど居こうけが。何ところの食を拵て。サタ ふく
出せ出やく 出せと。名のまこへでお個をまぞうして

参うどを更タあいう「アヽそうう更タ面白うう。サアお耶麻
さんはいつまあへ。何でもあくっち更タ。可愛あり
ませんねへお橋さん」橋「左根サヽ大勢ゆどが宜。お婦
さんの方へ行 舎の女ども更。その外大勢者さっけが。何
処へ行こと云お優美者 濃き処者へ行て。食と探て
来て異ふ」「今お婦さんのお跡こう。大勢拵つて来
つこうけが。ヨヤヽ何処へ行まこと子トいひ探さ祇
白あくうち拵ひて来ふけまこが。お橋お蓮い先ふ

す

進むるぞよ。お耶麻も沢山呑て

やく〳〵サア来てお蓮さんなどへお這入り「丈ぢやア吉俗

ど。酒肴を高盛せうト 這入あがり「菓次どんお来ゴヨ。

おでんを食ふ一箱ど。サア亜ふ出ておくまを「ヨヤくこれ

いお拵ひで。お我個さんでごゝのまん「吉松サ新と

十三人どヨ。花吉さん焼るうエ。何あう吉俗が多俗ふ

うトぎくめき合て花吉笛ど。急いで火鉢へ為きもの。

笑ひあがらふ亦立てゝ中奥ある亦勢あと

## 第十八回

茂下お耶麻い人くの奥ど強ぐをうち祝ろう。此方

の一間ふ居ろうしが。下服のあうう壁こと。痛むふうう

てお優亦を呼び。そのうーを云けるべ時節いあーふ

けど。最さも油形いあう雅。倘もお毫の儀う。

仍ふもせよ此処ふて。便利ぎんど今のうち。よく

毋屋へ連ゆんと。手拭その脇の下女どもと。共ふお

耶麻ぐ多を引て。別荘の毋屋へ来ろ。さて丈ちの

ホのそのよう告げて祖婆さまをホ伴ひありけれ
ば。彼いとゝ悲びよせ医師を呼ぶ。時で容子を診せる
ホ。それ更なるあるべしとのホ。奥の一男ホ屋風を立。
産の准備ホとろかる。お耶麻いまこそホ病痛を覚
えしと夜具ホ兼かる。産で長きるおろうあるべき筆
甲那文をかく。髪を解きて夢をのべて寝ん。お優
お耶麻がおくまるを抱きて力を副る。祖婆
ハ五稱。祖さとかく謂ひうしして後へまろび右へ左まる。

その間ホ頃ほど立。安く産落しかるハ。おのゝごとく男の
児。祖婆いと産湯を浴せ。今日ともいふべき。赤児
ホ泣きべき産ホあるべ。お耶麻ぶまる処へ祝接る。
妾ホ接種て次の間ホ。のぞと楽どる丈ホ。後ホつと
あき一四歳ホさい孫ホ宜孫ほんさ。お鼻つまろうお
口元ぶ。寄弟ホよく拵て入ッ寄ゆいまま。祭ってまアよ
おさまホと。四丈丈ほうとぶさいませ。種くお接ト祝
ぶ。産ハ易いとヤ次ホ。孫ホお稚くておゆや

こうで。お耶麻さんも今の方でだんまア御面白ござのません。「イヤ」大きお世話苦労ごうこで。お方ご刻て居るうこで。貴人も僥倖者弾も安堵サ。とまご不業用の若おうぢゃア。実不可ん妃ご。ア〻色く安心こで。ア〻赤ン坊の若ものご有くって大不首尾。今夫ぎ迄取不惜こヨ。大うと今日若び振お工の。あるめとお方ってこうで。実ハ殊不不知合ごア。産婦走今さ賀ぶ不来て。連て行く狀不也あるめエ「左振サ来て

お七殿ごもこませごア。お悪きうぶ。文ア夫ア。お玉若方と四ね清。拵ご「ト常く若労あ」こ。今安くこ産婦こ。殊不男の児者ア頻り不歎ご。徳ハ嘸ア喜ぶ。ア〻元不けりかる所へお情を振め。加の薬服屋ハ作くる連中。勿ハ帰り来て「ヲヤ走ん坊ご産まこのこエ。ドレお児ご「ヲヤ〻夫ア奇麗ご。お児サトレ世ご。お抱せ」「ヲヤ美しの吾倅ア。ものくこんお児を産ア居こ。ツレサまア。お孫さん吾

俺ガ中ヲ抱セヨ「アレサ余サンガ赤ン坊ヲ方此方ヘ引張風ガ有ルモノカラ抱ヲ洗ヒ
シ有サウデス。ドレ〳〵マアタシモ抱セウト雀躍ヒ抱テ
産所ヘ行クガ情ヒ事処ガ有ル文ガ。新ヲ入テ莞爾
笑ヒ「サテモ赤ン坊ウヒブヒウヒブヒ泣ク所ノ花
五月ノ菖蒲見ル彼方ヘ行テ産ノ祝ヒ酒一杯ヤラ
ウ。貴ガ中ヲ振ル云テ。産ノ若ヒ廓ヲ仕舞テ来ル
ヤウガ有ル付ケ「文ガ彼方ノ産ノ費ガ有サウデス
「丈振サ丈ガ宜ウ。産婦ノ方ヘ行マウ手ヲ引ク
ウト見ルノ酒殺ヲ有ル〳〵ウ有テ〳〵ウ有ル〳〵ウ大
酒嚢果ハ三法ノ順ガ有ルヒ鯉ヒ入テ入ル有ル
浮春ノ月ノ長ケ過ルヒ西ヘ傾キケレバ迷ヒ
テ徳七八疑。考ヘ〳〵ヒ不ヨウ。お情ヒ花ガ女ヒ中ハ。
〳〵ガ来ル事ヒ帰ル。文ガ中ハ球ガ残ル。新ヒ安ヒ産
ハ嬉セヒ。程後ノ上紫〳〵ウ「文「お
耶麻ヒウヒ。お指ハ行ヒ中ガ有ハウ。モウお粥ヒ中ガ

つくろう「ハイ」何とのぐさません今お嬢様を預まりなど何
どうぞ後らをまません「左様う事仕さん長俳の
知りねえ。産婦が長月あるうお嬢様ざあ甘味がって
食べとのがお耶麻ハエ食ぐ西のうノウ。西表さんハ何と
こうこと「表振サ別不変つことも。あへ四うお表作
きことが。十二月日不ありまりこうこと。お湯漬のあぐうを
まちう「何でも長月不しあけるもアあうう振ペトキニ
鳥表を処不振るう「パイこて不振まる「そうさ表何
とも太儀あぐう。翌夜ハ月ハうこう哉のまもく。陶後へ移て
来てのうち夜が縁今夜ハ簡を書うう。史を指て往
て安産の容子を。老爺さん不影ハて下せ「パイ畏
まりきこう。貝形がお嫁表きうこう。男のお児ちもアど
ざいます。哉お教ぐでぐさいませう「手処でハ先刻
西表不嫁こう。何ぞでも駕る不来て揺ぐのちもう万一
ちて血ガ栗ぐと表知こう。アア七夜でも減まで
ハ。此処不表こう寝らうとのう。その事も序ながら。

左様仰しゃるなら下せへ。文不拙ち史ア手方文掃。ま
と事務史その他の。女どもの入用の品を。取寄せざア不
自由ごらう。手ア処置ものぢうを冠ア不計らうて下さョ
「ハイそまつ、明日出容子次第ア侵夫を呼後者
まをうト文ちつハ義きを仰きを。彩事ふくも引ること
ア。殘ア新あく世後をして今宵ハ泊アその翌日。
本宅へ帰りしゃ。文より暴不分対て。赤の版不美
深と美青。或ひハ旅のりの香の物。美まで副て十ヒ

五人あ。欲仰の殺不と殺ろ紙をさて老生實実ちの。
挂義もこと在吹。落く祝義をまろ〜述まで祝義孫
若知者知已。先頃弟の祝ひのときを招ろまろ〜人ども。
こ系吹つけて祝義の殺ひ。或ひハ自分不来るもあるで
と在下へと混雑あ。日の過るを也美えれまで翌
ハ七欲とあつけてバ。その祝義不ろて殺ろ不若美を
過を在さ衣ハてそ〜あけまづて不祝さづ。いと張ひ
くさめき渡り。その衣ハ仰ろ号くべきと。食ろち参

ふぐ箱
大多屋の
春日郎

つゝて崗稚あゝ不。給こゝとして定まゝゞでゝ不旅て丈
右のゞ。唐云ふて い世を嗣べき。熱頓を沐て太ふと時
ぶゞさまゞべこの見も熱頓中系でゝを象つと象口弟と。
名くべーとい不ゝう。人ゝも文宣らんとゝて。別知ゞ名
けるゞ。ゝるる不お耶ゝ麻ハ者後ゝう。血の乳もあゝゞ
つゝえけまゞ。右不左犯立の西ゝゝ。謝湯漢ゝ文
不を まゞ。丈右の指め烏吉ハゝゝあゝ。筆勝お優文
也仏易ゝゝゞ順伯を先達ゝて。医師も四五人交智。

ゝの容併を給案あゝ。崗紙の親食習宋あゝ孫
どゝで栽ゝゝと時不ゝう。人ゝを美ゞれゝゝゝあゝ。
ゝゝゞ義祈の鎮守ゝある。鶴ゞ長の八幡宮。その時の
神仕併用へ日くの祈祷を形ゝゝ。或ひハ立山の梵
刹ゝゝゝも。験徳の功力ゞ唱不。ものゝゝ不けもゞ
験もゝゝ。形とも和ゝゝを陶護の光云来。烏帽ゞ刹
らせ不教べゞ。のゝゝ障るゝあゝて。四五日いゝち 移ゝ。
ゝゝて見ゝゝの容併。教ゞ却て愛へゝと変ゞ。玉

の男ある見ハ産とも。その身が亡くハ何ろせん。後今千
万両の。黄金ハ親の時ハ有も。子不孝を宝のあ
べきぞ。何ろと入見かるとも。一ぺび本復させ度と。烏
書をかくひまの遠くとけ。ふを渇を親ふ現ホの
と想像もろ

嵯峨通假寐巻之九 終